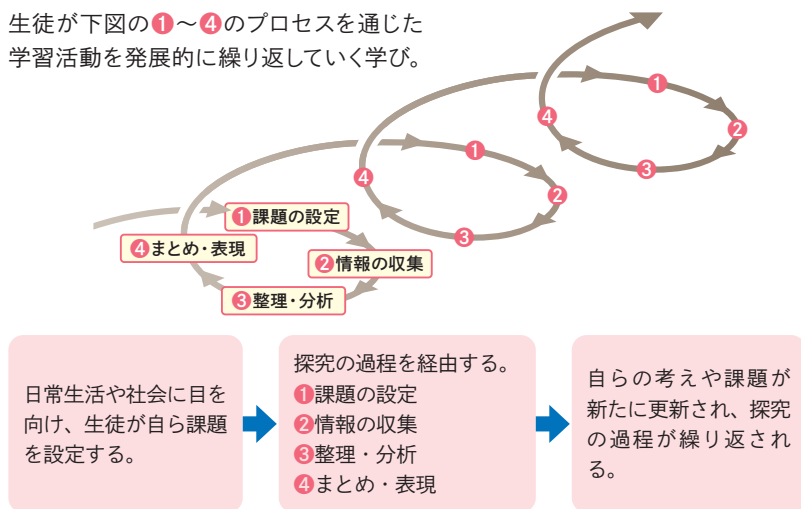


改めて考える、「探究学習」とはどのような学びか。 それを実現する上での課題は

高校で新学習指導要領が実施されて1年が経った。探究学習に取り組む「総合的な探究の時間」については、授業をどのように進めればよいのか、教師は生徒にどうかかわればよいのか、学校現場からは、依然戸惑いの声が聞かれる。そこでは、改めて、探究学習とはどのような学びなのかについて考え、それを実現する上での課題を整理する。

1 探究における生徒の学習の姿

生徒が下図の①～④のプロセスを通じた学習活動を発展的に繰り返していく学び。



※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

2 探究に欠かせない生徒の主体性

探究では、生徒が、身近な人々や社会、自然に興味・関心を持ち、それらに意欲的に関わろうとする主体的、協働的な態度が欠かせない。探究に主体的に取り組むというのは、自らが設定した課題の解決に向けて真剣に本気になって学習活動に取り組むことを意味している。それは、解決のために、見通しをもって、自ら計画を立てて学習に向かう姿でもある。

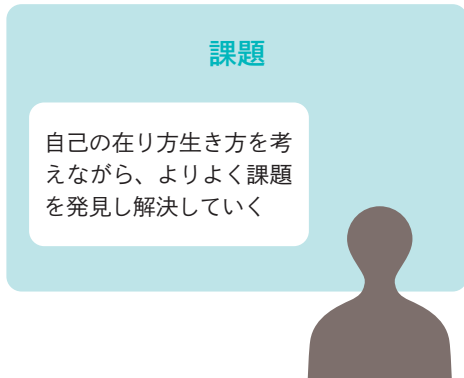
※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

2022年度から実施されている高校の新学習指導要領では、探究的な学習活動（以下、探究学習）の充実が求められている。改めて、「探究」とはどのような営みなのか。文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」では、「探究」とは、「問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく」ことであり、「物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営み」と定義している。

そして、「探究における生徒の学習の姿」として、探究のプロセスも提示され(①)、実生活や実社会の課題について、生徒が探究のプロセスを通して考え、判断し、表現することが大切だと指摘している。さらに、「探究」において欠かせないものの1つとして、「生徒の主体性」を挙げ(②)、生徒主体の探究学習が実現されている状態の1つが、生徒の設定する課題が「自分にとって関わりが深い課題(自己課題)」

4 課題と生徒との関係（イメージ）

自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を発見し、解決していく



※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

3 生徒の主体性を引き出す「自己課題」

高等学校においてこのような生徒の姿を実現していくに当たっては、生徒が取り組む探究がより洗練された質の高いものであることが求められる。質の高い探究とは、次の二つで考えることができる。（中略）もう一つは、探究が自律的に行われるということである。具体的には、
 ①自分にとって関わりが深い課題になる（自己課題）、
 ②探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）、
 ③得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）などの姿で捉えることができる。

※文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

5 生徒主体の探究学習を実現する上での課題

- 探究そのものの理解が進んでいない。まだ言葉が独り歩きしていると感じる。
- 「探究」という言葉が難しく、生徒にどの程度「探究」させればよいか分からない。
- 全教員で共通認識を持って取り組むことが難しい。
- 生徒が探究学習の計画を立てるの必要性は分かるが、その指導の仕方が分からない。
- 今行っている探究学習の方法が正しいかどうか、迷っている教師は多いと思う。
- とにかく実践し、そこで浮かび上がった課題を次に改善すると

- いった方法でしか、探究学習の指導の進め方が分からない。
- 生徒がどうすれば自己課題を設定できるのかが難しい。いろいろな支援をしているが、うまくいっていない。教師の働きかけによって課題を見つけることができた生徒の事例を知りたい。
- 探究学習は、教師でも想定しない事態が起こり得る。指導にあたっての教師の心構えや、最小限の必要な準備、教師間での意識・ノウハウの共有方法など、実践を知りたい。
- 探究学習が、単なる調べ学習になったり、安易なグループ学習に終わったりする可能性がある。どうすれば探究が深まり、生徒にとって意味を持つ学びになるのか、つかみきれていない。

※『VIEW next』高校版読者モニターへのアンケート結果（2023年2月にウェブとファクスで実施。有効回答数は118）、次年度誌面に関する読者アンケート結果（2022年10月にウェブとファクスで実施、有効回答数は1,380）を基に編集部で作成。

になっていることであると説明している(3)。それは、「総合的な探究の時間」などで行われる探究学習が、「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し解決していくような学び」であるとも言えるだろう(4)。

そうした生徒主体の探究学習が求められる中で、学校現場は様々な課題を抱えている(5)。

『VIEW next』高校版の読者モニターに実施したアンケートなどからは、探究学習がどのような学びかを捉えきれず、教師として生徒にどうかかわればよいのかが分からない様子がうかがえる。

以上のように、探究学習がどのような学びか定義され、それを推進する上での留意点が示されていても、学校現場においてその理解や教師間の共通認識が深まっていないのは、探究学習という学びや、それに取り組む生徒のあるべき姿、そして教師のかかわり方が、具体的にイメージしづらいからではないだろうか。

そこで今号は、帰納的にアプローチすべく、生徒が主体的に探究学習に取り組むとともに、教師が試行錯誤しながら彼ら・彼女たちを支援する2校の事例を紹介する。また、各校が生徒主体の探究学習を推進できるよう、県を挙げて学校現場を支援する動きが増えてきている。その事例として、青森県教育庁と福井県教育庁の取り組みを紹介する。